聴覚障害児のダンスにおける リズミカルな表現とモティフ

佐分利　育　代（鳥取大学）

【目的】

ランガーがあらゆる運動を身振りに変えるものとしてリズムをあげ，「現実からどのようなモティフが入ってきても，それらのモティフはその入るということ自体でリズム化され形式化される」とするように，モティフの導入，運動として対象をとらえることからリズム化は始まるとされている。ドゥブラーは，表現形式としてのダンスを，内的リズムと外的リズムの一致としているが，聴覚障害児のダンスにおけるリズミカルな表現も，その子どもの享受の結果ととらえられる。

鳥取聾学校の子どもたちを対象に，学習によるダンス技能の発達に関する縦断的な考察を行った結果，各段階でのダンス即興表現には，モティフの導入，時間的な継続，グループ化，類似性と再帰，アクセント，流れなどのリズムの特性がみられた。学習による表現技能の発達は，リズム化に向けて自分のからだとからだの動きを探究する過程であった。

本研究は，聴覚障害児のダンスにみられるリズミカルな表現がモティフの導入の結果によるものであることを，観賞者が得たイメージとの比較により実証に近づけることを目的とする。そのことを通して内発的なリズム学習を聴覚障害児教育に提言したい。

【方法】

鳥取聾学校中学部と高等部の女子（９人）の，テーマ「雪」での２分間のダンス即興表現をビデオテープに収録（1993年２月８日）。ビデオ観賞より得られたイメージによる構成の分析を鳥取大学保健体育専攻の３年生７人（男子５人，女子２人で，約１年間のダンス経験者）に依頼（1993年３月３日から10日）したものと，験者による運動分析を比較。

【研究結果と考察】

今回対象とした聴覚障害児のダンス経験は様々だったが，経験の少ない生徒の表現にも，リズム化の特徴を持った運動があり，それがリズム感のある言葉で表されるような明確なイメージを観賞者に与えていた。

図１はダンス学習経験５年目のMa. Nの表現におけるモティフｅの繰り返しの様子である。この，即興で行われたとは思えないほど整理された動きで繰り返された一続きの表現Ｅに対しては，７人の観賞者全員が，時間に伴う変化を感じさせる，リズム感のある，明確な，しかも類似したイメージを書いていた。それらは，「下まで降る様子」「ゆっくり漂う雪」「風にふかれ降り続く雪が積もってゆく」「おちてゆく」「積もる」「止む」「静かに」である。

ダンス学習１年目のE. Y.の表現にも，モティフの繰り返しや，感じの変化を感じさせる一続きの運動があり，「ふわふわと」「ゆれて～まわるのリズムにのって」「風にまっている」の言葉で表されるイメージを観賞者に与えていた。

【まとめ】

どの生徒の表現も特に明確なひとまとまりの運動が繰り返されているほど，各観賞者によく似たリズムや時間による感じの変化を感じさせるイメージを与えていた。聴覚に障害のある生徒がどの様にして，ひとまとまりの動きのイメージを捉えているのか，なぜ繰り返そうとするのか等リズム化へのメカニズムについては今後の課題である。しかし，繰り返された運動の単位はモティフ，すなわち享受した内容でありそれがリズミカルなダンスでの表現として観賞者のイメージを引き出していると解釈できた。

様々なリズムの文化があり，太鼓の振動や指揮者の身振りがそれを伝えてくれることも重要な手がかりである。だが，子どものダンスに現れたリズムは，子どもが何を見，何に感動し，何を自分のものとして取り込んだかを伝えてくれている。子どもの内からのリズムを引き出し，伸ばすことの意味を改めて強調したい。

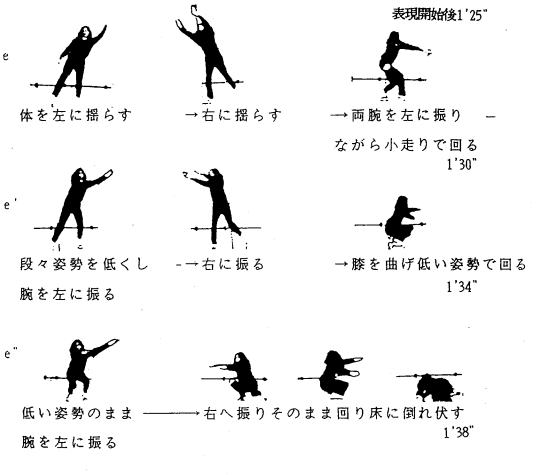

図１　基本のステップとそのバリエーション